えくてびあん

2 立川を語ろう　立川に生きよう
FEBRUARY 2000 EKUTEBIAN Vol.18 No.187

表紙の人／井上康子（若葉町）　撮影／綱江英公

新連載

たちかわ名木伝 一

案内人・鈴木功

【山茱萸】

【サンシュユ】
学名：Cornus officinalis Sieb.et Zucc.
属名は「角 cornu」に由来し、材が堅いことを表し、種小名は「薬用の、薬効のある」の意。

所在地：粕谷玉枝さん宅（西砂町）

旧砂川地域の古い農家には昔からサンシュユの木が植えられていた。「おらがんとこでもあったがもう切ってしまった」という話を耳にすることがある。言い伝えによると新田開発当時、幕府の奨励により植えられたものだという。その時代を思わせるような立派な古木が、西砂川の粕谷玉枝さん宅にあった。殿ヶ谷の新田開発時、ヒイラギ・サンシュユ・ウメの三本が各戸に植えられたこと以外、詳細は解らないと粕谷さんは言う。いまだ樹勢も盛ん、姿形とも立川の歴史を秘める名木であることは間違いない。

鈴木 功さん

ではなぜサンシュユが植えられたのか。サンシュユは早春、芽の出るのに先立って美しい花を咲かせる。早春を飾る黄金のようなめでたい木。一方で8月頃には実が成熟し、その果実は解熱剤や強壮剤として用いられた。農業労働で消耗した体力を回復させる薬としての利用方法もあった。幕府がこの木を下賜した理由は、そこにあったものと思われる。

山茱萸はさきがけの花怯(ひる)むなよ

谷川水車

ホンネde語ろう

学校なんて要らない？そんなことは絶対にない。

元立川一中校長・教育相談員 駒井逸郎さん

啓介　ウチの子供が小学生の時にね、父母会っていうんですか、授業参観に呼ばれたんですよ。そこで教師が子供に「皆さん、ノートを一個出してください」って云ってて（笑）。

駒井　（笑）。

啓介　それを聞いて「こりゃダメだ」って思いましたよ。モノの数え方も知らないような教師がいる学校には、大事な相談なんて出来ないでしょう。

■駒井逸郎（こまいいつお）／40年ほど前、伊豆大島の中学校への赴任から、駒井さんの教師生活は始まった。担当は理科。その後、中野の中学校を経て立川へ。五中から七中、六中の校長、一中の校長を歴任。その間、子供たちの教育に関するあらゆる相談を受けるべく、市によって設けられた「教育相談室」の教育相談員を務め、多くの相談事に携わり解決に尽力。昨年、相談員を退職、現在も砂川公民館が主催する「こども科学クラブ」の講師として、子供たちとふれあう日々に余念がない。
■立井啓介（たていけいすけ）／月刊えくてびあん編集人。

駒井　まあ小学生の場合、低学年の授業ではわざとそういう云い方をする場合がありますが……（笑）。

啓介　駒井先生が相談員をされていた教育相談室にも、そういう親子が来てたんじゃないですか。知っている教師だと話しづらいとか。

駒井　そうですね、自分の学校の先生には相談しにくいことというのは多かったですね。担任の先生に対する苦情なんてのは、しょっちゅうでしたよ（笑）。

啓介　具体的には、どういう内容の相談が多かったんですか。

駒井　いや、それはあまり云えないんです。もともと、十数年前に学校が荒れた時期があったでしょう。

啓介　ええ、校内暴力とか。

駒井　あの頃、学校の枠を越えて教育相談をいつでも受けられる施設として、市が支所などに設けたんです。立川は他の市区町村に比べて早かったと思いますよ。

啓介　今でいうカウンセリングのようなものですか。

駒井　ええ、その頃はそういう言葉はまだ一般的ではなかったんですが、まさにカウンセリングの原型みたいなものでしょうね。

啓介　学校で教師が行う相談とは、どこが違うんでしょう。

駒井　やはり教育相談の本質を全うするということでしょうね。子供の目線に立って物事を考えるということ。「見る」ではなく「看る・観る」。「聞く」ではなく「聴く・訊く」という姿勢、これが大切なんですね。

啓介　でも先生、それは本来、学校がやって然るべきことですよね。

駒井　私もそう思います。

啓介　今うかがったお話も含めて、僕は学校というものは本当に必要なのか。むしろ学校なんて要らないんじゃないかと思うんですよ。

駒井　いやいや、私はあるべきだと思いますよ。ひとつの場所で勉強することは必要だと思います。

啓介　そうでしょうかねえ。

駒井　たとえば立井さんは、子供の頃の学校の思い出ってありますか。

啓介　僕ですか？　あります、あります。僕は小学生の時は疎開先の千葉の学校に行ってたんですが、担任の先生が面白い先生でね。毎日、一時間目は必ず本を朗読するんですよ。特に野口英世の伝記を読むことが多くてね。時折、読みながら自分で感動して泣いてるんですよ（笑）。

駒井　（笑）。

啓介　高校の時には、教頭先生がユニークでね。毎日授業が終わると、大工支度をして校舎の傷んでるところを修理してるんです。僕らはその後ろ姿を見て、毎日学校生活を送っていた。

駒井　素晴らしい先生方に巡り会ってますねえ。学校には、そういう「出会い」がありますでしょう。

啓介　そうなんですよ。いわゆる一流校ではなくとも、そういう出会いがあったということの方が、人生は幸せなんじゃないでしょうかねえ。

駒井　そう考えると、学校の存在云々よりも、むしろ「学力偏重」という価値判断の方が問題となってくる。

啓介　いわゆる偏差値教育とか？

駒井　ええ。よくいわれるように、やはり教育のシステムの問題ですね。たとえば、同じ問題が出題されても、一時間で解ける子もいれば、三時間かければ解ける子だっているんですよ。二人とも正解にはかわりはない。テストというひとつの切り口だけで、その子の価値を決定づけてしまうのは本来おかしいんです。しかし現場の教師の場合、どうしても英・数・国といった主要教科に目がいってしまいがちなんでしょうね。

啓介　学科の重要性はわかるんですが、たとえば「この子は数学が得意だ」というのと同じように「この子は心根が優しい」というのも、その子の評価にはならないんですか。

駒井　ええ、その子のいい部分を見ようとする。今は少しづつ、そういう方向に見直されていますね。進学に際しても、試験の結果も大切ですが、より内申書を重視する方向になりつつあると思います。「ナンバー1」より「オンリー1」ということですね。

啓介　成績順で判断する方が簡単でしょうからね。

駒井　成績の観点から云えば、たとえば5段階評価で常に4や5をとっている子はまあいいんです。気をつけなくてはいけないのは、ずっと1だった子が2に上がった場合なんですよ。

啓介　なるほど。普通は1も2も変わらないと思いがちですが…。

駒井　違うんですね。素晴らしいことなんですよ。その子ががんばった結果だと評価してあげなくてはいけないんです。

啓介　先生、その辺のことになると学校ばかりじゃなく、むしろ親の問題にもなってくるんじゃないですか。成績表を見るのは親なんですから。

駒井　ええ、その通りなんです。たとえば先ほど授業参観のお話が出ましたけれど、近ごろはね、ガムなんか噛みながら子供の授業を観てる親がいるんですよ。「こりゃダメだ」と思いました（笑）。

啓介　ははは。

駒井　教育に対する考え方は千差万別でいいんですが、例えば小学生の場合など、テストでがんばったが50点しかとれなかった。だったら残りの50点を親子で「埋めて」百点にする。そんなフォローが家庭の役割だと思ってもらいたいんですね。

啓介　いわゆる、落ちこぼれと呼ばれる子供たちの居場所もなくなってしまう。

駒井　自分の存在価値を持てなくなってしまう子が増えていることは確かなんです。教師はそれを持たせる、その可能性を見つける手伝いをすることが仕事なんですよ。

啓介　僕が思うに、今の学力偏重、学歴重視の教育の目的が、いわゆる一流企業に入ることだとしたら、それはとてもくだらないことだと思うんです。要は「どこに入るか」ではなく「何をするか」でしょう。自分の興味の持てることがあったら、大学なんて行かずにどんどんその道に進めばいい。そういう自分の道を開拓していく精神を養うのも、教育の大事な役割だと思うんですが。

駒井　ええ、おっしゃる通りだと思います。でも逆に云えば、だからこそ大学に行ける者は行った方がいいというのが私の考えなんですね。教育というのは、云ってしまえば「対応力を養う」ことなんです。立井さんが云われるように、自分の道を見つけて、それに邁進できる者は幸せだと思います。でも人生を生きる上で、先々何が起こるかわからない。重大な局面に立った時、いかにその困難に対応していくか。そこで、その人の受けてきた教育の力が発揮されてくるのではないかと思うんですよね。教育や教養というのは「下着」と同じなんですよ。

啓介　え、下着ですか？

駒井　表に出しちゃまずいが、ないと困る（笑）。

啓介　ひけらかすもんじゃないわけですからね（笑）。ところで、駒井先生にも素晴らしい先生の思い出はあるんですか。

駒井　そうですねえ…。私の教師生活は、伊豆大島の学校への赴任から始まったんです。離島のいわゆる過疎の学校だったんですが、そこの校長先生が柳田国男の弟子だった人でね。

啓介　ほう。

駒井　ある日、私が受け持つ子供が「かなしいから休む」と云ってきたんです。いったい何が悲しいのか、具合が悪いのならともかく、そんなことで休む理由がわからず、私はその子を叱ったんです。ところがその後、その地方の言葉で「かなしい」は「病気」という意味なんだとわかった。

啓介　方言だったんですか。

駒井　ええ、私の不勉強で子供を傷つけてしまったんです。本当に「かなしい」思いをさせてしまった。そこでその校長先生に云われたんですね。君は勉強の意味をよくわかっていない。専門のことならよく知っているが、他のことは何も知らない。勉強というのは「人間を学ぶ」ことだ。もっと人間を勉強しなさい、と。

啓介　ああ、素晴らしいですね。

駒井　教師生活の最初に、そういう先生に出会えて幸せでした。何か一本、自分の中に「線」ができた感じがしましたねえ…。

曙町	東京赤十字血液センター	曙町2-1-1-9F 527-1140
曙町	和生菓子製造直売 日の出屋 本店	曙町2-2-18 522-3308
曙町	オリオン書房 第一デパート店	曙町2-2-25-3F 523-3311
曙町	オルゴール・雑貨 グーシーハウス	曙町2-3-7 525-2588
曙町	第一勧業銀行 立川支店	曙町2-4-5 522-5151
曙町	富士銀行 立川支店	曙町2-4-6 524-3121
曙町	手づくりの味 二木のパン	曙町2-6-4 522-2278
曙町	さくら銀行 立川支店	曙町2-6-11 522-2151
曙町	Italian Cuisine サヴィニ	曙町2-7-10 525-1662
曙町	オランダヤ ハイネケンフック	曙町2-7-20-8F 527-8045
曙町	Art & Caffee Room 新紀元	曙町2-7-21-4F 528-6952
曙町	多摩中央信用金庫 本店	曙町2-8-28 526-1111
曙町	多摩中央ミサワホーム	曙町2-8-29 527-3388
曙町	三上鰹節店	曙町2-8-30 522-3259
曙町	フロム中武 1F受付	曙町2-11-2-1F 524-7111
曙町	輸入文具 ホワイトハウス フロム中武	曙町2-11-2-4F 525-8558
曙町	ステンドグラス ばさーじゅ フロム中武	曙町2-11-2-4F 522-1941
曙町	立川リージェントホテル	曙町2-11-7-2F 522-1133
曙町	パティスリー バーゼル	曙町2-11-8 523-3746
曙町	cafe バーゼル	曙町2-11-8-2F 523-3746

えくてびあんの輪

人がゐて、街があります。
あなたがゐて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも、えくてびあん！

今月は曙町・高松町のお店です。

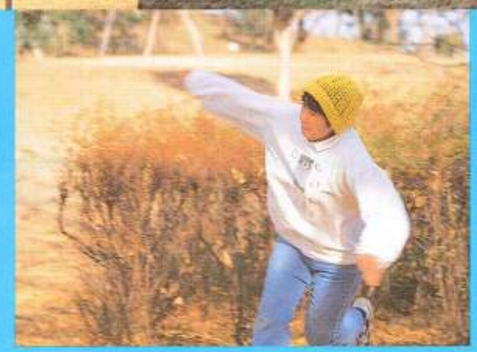
曙町	Wine & Dining るもん	曙町2-12-13 527-3022
曙町	ケンタッキーフライドチキン立川店	曙町2-12-16 528-2636
曙町	住友銀行 立川支店	曙町2-13-1 522-6171
曙町	東京三菱銀行 立川支店	曙町2-13-3 524-4121
曙町	立川郵便局 本庁舎	曙町2-14-36 524-6114
曙町	カフェ アバン	曙町2-17-15 527-4479
曙町	トポス 立川店	曙町2-18-18 525-0331
曙町	三井石油 フロンティア立川	曙町2-19-9 527-3943
曙町	手打ちそば 閑	曙町2-25-3 525-1400
曙町	三田花店 立川高島屋店	曙町2-39-3-1F 526-4187
曙町	喫茶 エミリーフローゲ 立川高島屋店	曙町2-39-3-3F 526-9788
曙町	立川高島屋 ギフトサロン	曙町2-39-3-7F 525-2111
高松町	多摩画材（景品交換所）	高松町2-1-25 522-6031
高松町	丸助青果店	高松町2-4-18 522-3542
高松町	スーパー やなぎや	高松町2-5-17 522-4322
高松町	肉の専門店 伊勢屋	高松町2-6-20 524-2734
高松町	ケーキ&カフェ マリアン	高松町2-10-22 524-3912
高松町	米穀・食料品 横町屋	高松町2-11-23 522-2609
高松町	山梨中央銀行 立川支店	高松町2-16-13 526-1571
高松町	レストラン 榎	高松町2-22-2 526-2276

ディスクゴルフ日本選手権で

光子さん、堂々の第4位！

●平成11年12月11日・12日
第11回「昭和記念公園オープン・ディスクゴルフ日本選手権」

ちょっと前まで“フリスビー”と呼ばれていたこの円盤、
いまは“ディスク”と云うんだそうな。
ボールの代わりに、このディスクを使って競い合う「ディスクゴルフ」。
その日本一を決する選手権に、わが立川から3名の選手が出場すると聞いて応援に向かった。
エントリーしたのは西野進介さん（曙町）、土田 岬さん（柴崎町）、
そして土田さんの奥さま、光子さん。
全国から集まった強豪を相手に3人は大健闘。
なかでも光子さんは、プロレディス部門で堂々の4位入賞を果たした。
若さや体力だけでは勝つことが難しいメンタルスポーツ、ディスクゴルフ。
次代のオリンピック競技と目されるこのスポーツ、
その日本代表に立川人の名前が入ることは、もはや確実か？



●堂々の４位入賞を果たした土田光子さん（柴崎町）の華麗なフォーム。ご主人の岬さんに誘われて始めたディスクゴルフ。今では国内屈指の女性プレイヤーだ。

●招待選手として来日した遠投距離世界記録保持者、スコット・ストークリー選手（米）。デモンストレーションで見せた豪快なスローイング。

●ディスクを象った入賞盾を手に喜びの光子さん。奥さんの大健闘を称える岬さんも嬉しそう。（左）

●プレイに裏方に大活躍の西野さん。スコット選手と記念撮影。（右）

●土田 岬さん（柴崎町）のキャリアは、20年近く前に、“フリスビー”が日本に上陸した頃から。誰よりも早くディスクゴルフの魅力を知った「ベテラン」選手。

●曙町で不動産会社を営む西野進介さんも早くからディスクの魅力にとりつかれた一人。選手としてだけではなく、協会スタッフとして普及活動に勤しんでいる。

表紙の人 井上康子さん（若葉町）

エッグアートの世界での第一人者。はじめは、いわゆる「お稽古ごと」としてはじめていたのだが、それにこころ満たされることなく、独自の手法をもって「アート」の世界へと踏み行ってゆく。エッグといえば、どうしても鶏卵を連想するが、世界にはいろいろな鳥がおり、それらをとり寄せて、まさに「卵の芸術」にまで仕上げてゆく。その集中力と眼力は芸術家がもっているそれで、他の追従を許さない。パイプオルガンの道にも長けてをり、日米をまたにかけての活躍ぶりは目覚しい。

（於・農業試験場／撮影・細江英公）

東風

2000年の扉が音をたてて開かれた。えくてびあんは創刊されて何年になりますか？とよく訊かれるが、2000年の前ではとても歯がたたない。15年半とはなかなか云いづらいものである。それでも、この間に多くの方とお逢いでき、普通の仕事をしていてはこうはいかないと、よく身内で話し合うことがある。まったくの話、葉子折り一つも持っていかないで、図々しくお茶の間にあがらせていただいて「取材」と称して長話しが出来るのも、えくてびあんの特権、いや、やはり「図々しさ」であろう◆えくてびあんは初めから、いわゆるメジャーな人ばかりを追ってきたわけではない。街にひっそりとしていて、しかも存在感がある人を好んで取材してきた。今月の「えくてびあんの眼」に登場したディスク・ゴルフなどという競技は、現場に行ってはじめてどんなものかを知ったのだが、全国選手権で立川を代表する土田ご夫妻は、この道十五年を越えるという◆よく、定年を迎えたら趣味を持たなければと聞くけれども、実は定年を迎えてからでは遅いのではないか。心身が自在なうちに「その道」に通じておくことが肝要に思われる。メジャーであろうとマイナーであろうと◆大寒を　越えて花咲け　えくてびあん

【第二次えくてびあん同人】
編　集　新井紀美子 / 大久保清志 / 小林康史 / 山田五郎
デザイン　池田隆男 / AMNET DF
写　真　中村　伸 / 五来孝平

えくてびあん 2月号
第18巻　通巻187号
平成12年2月1日発行
発　行　えくてびあん編集工房
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F
TEL. 042-528-0082　FAX. 042-528-0065
編集人 / 発行人　立井啓介
印　刷　(株)大廣社

第7回えくてびあん杯争奪 立川べーごま選手権

大戸勝明選手『(株)大廣社』専務取締役

第7回戦G組

小林康史選手 月刊えくてびあん記者

大番狂わせ！名人・大戸選手、初心者に大敗

少年時代に「鳴らした」歴戦の強者が参戦する本選手権。大戸選手もまさにその一人。いまだ衰えぬ鋭いコマさばきは、往年の強さを物語る。その強豪に対し無謀にも挑戦の名乗りを上げたのは、本誌記者・小林。この選手権がきっかけでベーゴマを覚えた小林選手。キャリア数ヶ月の初心者が、かつての名人にどう立ち向かうか。注目の一戦は誰もの予想通り、大戸選手のリードで幕を開けた。早くも汗だくの小林選手に対し、大戸選手は余裕の表情。が、その余裕が仇となったか、中盤から大戸選手のコマに勢いが消え、みるみるうちに逆転。開始後30分、ついに大戸選手のコマが底をつき試合終了。大喜びの小林選手に対し、大戸選手は呆然。

真味百撰 ㉞

純中国料理 北京大飯店

柴崎町2-4-19 オネストヴィレッジ2F
522-6393 / 11:30 ～ 22:00 / 月曜定休

南口、柴崎の地に創業35年
三代続く本格中華の灯を守るべく
味ももてなしも「一生懸命」

台湾出身の初代がここ柴崎町に店を構えてから実に35年。専門店の育ちにくい立川にあって、『北京大飯店』は純中国料理の看板を守り続けてきた。三代目にあたる森ノリ子さんは語る。「とにかく“一生懸命”だけなんです」。35年の歴史など、どうってことはない。その時その時、お客様にどれだけ喜んでもらえるか。そのことのみに専心する毎日だという。自信を持ってメニューに加えたものが全くオーダーされなかったりと、これだけ続けていても「わからないこと」ばかりだと笑う。

それでも安易に時代に迎合したりせず、本格派の信念を曲げずにいられるのは、味もさることながら、スタッフのチームワークによるところが大きい。訊けば、フロアの女性スタッフは皆、森さんのご姉妹。新メニューを決める時は、調理長の高橋チーフを囲んで全員が意見を述べ合うという。森さんを中心とした“一生懸命”の輪が素晴らしい。こうなるとそろそろ四代目の話も、と伺うと、先だってより森さんの息子さん2人が揃って厨房に入り、現在、高橋チーフのもとで料理修行を行っているという。経営者の森さんが、一瞬母親の顔になった。

八宝菜をメインに添えた贅、量ともに充実の「武漢セット」(1,600円)。40名ほどで利用できるお座敷も完備。宴会メニューは5,000円から。

ゴロさんの独断毒語 ⑦

淑気

麗しく二千年の新年をお迎えのことと存じます。一夜明ければ元朝の・・・

不思議なもので、大晦日まではざわざわと忙しい時間が流れていたのに、元朝を迎えると世に清浄な空気が漂います。元日に感じられる荘重な、めでたい気配を「淑気」というのだそうです。光や空や雲のたたずまいまでもが、いつになく厳かに感じられる。

新年の清らかな、そして、なごやかな様子を表して余すところがありません。

今年の元朝は高尾山の「蛇瀧」の水行の取材に伺い、ことさらの淑気を味わってまいりました。佐藤勝昭さんが率いる空手道場「佐藤塾」の有志が元朝の浄水を浴びて、心身を浄め一年の計とする恒例の行事だそうですが、私が立ち合わせていただくのは勿論初めてのことです。

一同は道着に着替えて、空手独特の気合いを入れて一人づつ瀧行に入っていきます。その気迫たるや、私の数少ない人生経験では見たこともない光景で、圧倒されっぱなしでした。私は写真機をもって撮影しているだけですが、もしあの行に加わっていたら、死んでしまうのではないかという程の荒々しい修行です。こんな場合に写真なんか撮っている場合か、と己れを攻める声が内から聴こえてまいります。

なにしろ、塾長みずから真っ先に瀧を浴び、次いで少壮の塾生たちが進んで浴びるのですが、その中には、女性もおり、六歳の少年もおります。取材と称して「見物」をしている当方の立場はまことにやるせないものがございます。

瀧行をおこなう場所は、当然ながら土足は厳禁です。瀧の音がザーザーと鳴っているのですから、通常であれば「淑気」からは程遠いものと思われますが、「行」にはいると、そこはまるで別世界で「淑気」の極致と云ってよろしいでしょう。

日常にはない世界を垣間見て、立川へ帰り、屠蘇を酌み、二日、三日と過ぎてゆき、四日には仕事始めです。

段々と「淑気」が薄れていくのを感じ、寂しさを覚えながら時間の過ぎてゆくのを眺めている。こうして、私たちの一年は淑気から遠いものとなってゆくのでしょう。

轟々と蛇瀧の音や淑気満つ　ごらう

一旬、手帖にしたためておきました。ところで、これは自分一人の感じ方なのでしょうか、毎年「節分」を迎えると「淑気」と似た気分になります。長い冬とはいえ、日脚が少しづつ伸びて、それは豊の目ひとつづつだと云われておりますが、節分を迎えると、――春だ！という喜びと同時に、厳かな空気があたりを満たします。

フランスの不世出の歌手、ジャック・ブレルが『春』（ル・プランタン）という歌を静かに謳いはじめる、これもまた忘れ難い瞬間でありました。

（やまだごらう・詩人）

イラスト 綾 幸子

連載 四字熟語(29)

麻中之蓬

まちゅうのよもぎ、と読む。

麻の中の蓬はまっすぐに育つ。人間も環境が大切、いい友人を選びなさいということ。

蓬は普通、枝が横にはって上にまっすぐには伸びない草だが、麻の中に生えれば、周りの麻と同じように自然にまっすぐ育つ。このことから、教育にもよい環境が必要だというたとえに使われる。「朱に交われば赤くなる」は反意語句である。

立川に育てられて六十四年
真如苑
柴崎町1-2-13 Tel.527-0111(代)

ふれあい、さわやか
山梨中央銀行
＊立川支店＊
〒190-0011 立川市高松町2-16-13
TEL 0425-26-1571

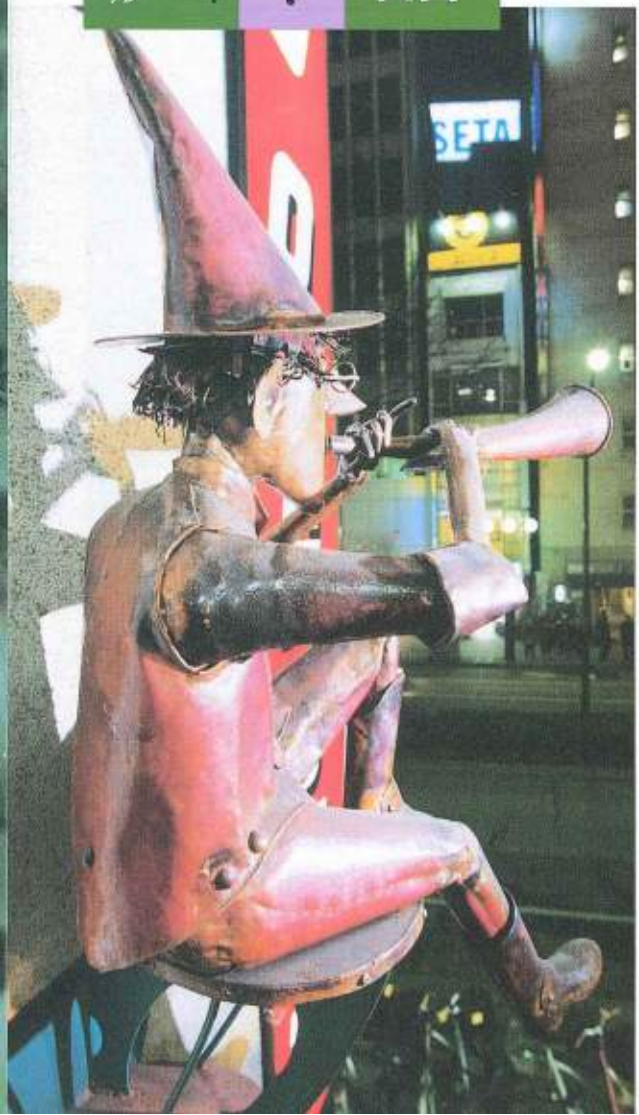
デジタルえほん
メモリーブックにどうぞ…
ミッキーやキティちゃんと一緒に…!!
あなたの写真と名前が絵本の中に入ります。
PLANNING・DESIGN・PROCESS・PRINTING
株式会社 大廣社 ☎042-527-1911
〒190-0022 東京都立川市錦町5-17-13
FAX.527-1949
E-mail JC105215@nifty.ne.jp

赤川作品十二撰 7

「立川の笛吹き」

立川市曙町・カクニビル

北口に昨年オープンしたギャラリー『新紀元』。その記念にオーナーからの依頼で造りました。もともとは歩道に設置していましたが、心ない人によって壊されてしまい、止むを得ずビルの二階の壁面に取り付け直しました。道行く人たちと同じ目線で何かを語りかけていたはずのこの像も、今はこうして高い場所から、ひとり寂しく笛を吹いています。

僕の造るものは街の中に置かれるものが多いので、いたずらされたり壊されたりすることはこの像が初めてではありません。その度に「在り続ける」ということの難しさを噛みしめます。確かにいい気持ちはしませんが、僕はこう考えることにしています。無視されるよりはいい、と。壊すというのもひとつのコミュニケーション。でも、いつかは違う形の接し方に気づいてくれるだろう。この笛吹きのメロディーに耳を傾けてくれる人が増えるだろう、と。僕はそれを信じています。

（1998年制作・赤川政由）